

- 誕生日祝カード、有難うございました。守谷 巖樹君
- 2月は私の誕生日です。馬場 将嘉君
- 今月は私の誕生日です。先日、区役所より敬老パスの配布通知が来て、ガクツとなりました。近藤 洋輔君
- 間もなくバスがもらえる年になります。松井 善則君
- 下の息子が第一関門を突破しました。2月22日は私の結婚記念日です。泉 憲一君
- 高村さんに、玉ノ湯温泉銭湯でお世話になりました。ラーメンは格別美味しかったです。遠山 堯郎君
- 今日の午前中、八木沢先生に大変お世話になりました。吉木 洋二君
- 次男に長女が生まれました。本多 清治君
- 確定申告が始まります。電子申告も。稲垣 豊君
- 暴力追放愛知県民会議出席のため早退します。鈴木 圓三君
- 2月3日節分は恵方の竜泉寺、2月4日の立春は伊勢神宮に参拝してきました。天野さん・館さん、お世話かけました。稲葉 徹君
- 一段と寒くなりました。皆さん、身体には気をつけて下さい。小林 幸男君
- 中川さんに挨拶されました。大川 嘉成君

バナー贈呈



本日ビクターとしてお越し頂いた、上野東RCの松井陽樹君に景山副会長よりバナーが贈呈されました。

委嘱状伝達

2004～05年度第2760地区ロータクト委員に委嘱された遠山堯郎君に、景山副会長より委嘱状が伝達されました。



卓 話

「一陽来復～冬の次には必ず春が来る」

(布竹村代表取締役・占術家(古い玉手箱))

竹村亜希子様

今日お話しする「一陽来復」とは、「易経」の中にある言葉です。「易経」と言う占いの本だと思っていらっしゃる方が多いと思いますが、実は、世界で最も古く、孔子が生きていた2500年前に、既に「古典として学ぶべきもの」とされていた中国の書物です。

「一陽来復」——1つの陽が再び帰ってくるというところか。太陽と月を陰と陽に分けると、太陽が陽で、月は陰。冬至の日、陽——日照時間は最も短くなり、順々に長くなっていきます。そして、半年後の夏至の日、日は最も長くなり、また少しずつ短くなっていきます。つまり、一陽来復とは冬至を指し、陽が回復する、生物

が育ち始める。即ち「春が来た」という意味です。

ところが、実際に私達が感じるのは、冬至からますます陰——寒さが厳しくなっていくということです。本当は既に陰から陽に切り替わっているのに、暖かさを感じません。実は、「易経」で教えているのはそのことで、物事の表層に出てきた兆しを捉え、目に見えないものを察知し、前もって準備をしないといふことなのです。

東西の様々な古典中、「易経」の大きな個性と言え、「時の専門書」であるということです。易には、変易・不易・易簡という3つの意味があります。変易とは、宇宙にあるもの全て、一瞬たりとも変化しないものではなく、私達の置かれている立場・会社や人間関係、あらゆるものが一刻一刻変わっていくということです。不易とは、あらゆるものが変わっていくけれど、その変わり方には、春からすぐ秋にならないように、一定の普遍の法則があるということです。そして、易簡で言っているのは、変易・不易の法則というのは、一見複雑に見えるけれど実はとても易しくてシンプルなのであるということです。更に、「易経」で言う「時」とは、「時間」のことだけではありません。ある人が置かれた立場全体について、時・所・位という3つの角度から説明しています。

『易経』の中から「鼎」について話を致します。鼎というは、3～4本の足がついた食べ物を煮炊きする道具ですが、古代中国では天帝に捧げる食べ物を煮炊きしたことから、王朝の権威を象徴する、聖なる器とされてきました。「鼎の軽重を問う」という言葉は、昔、楚王が周王朝に対して「鼎の軽重は如何」と問い質した処からきています。鼎＝王朝の実力を疑い、実力がなければその権力に取って代わってやるという意味です。

『易経』は勿論、楚王の時代には既に古典です。では何が書かれているか。鼎の構造を思い出しますと、真ん中に食べ物が詰まっている器があります。そして、下に3～4本の足があります。上には、持ち運ぶためにつるを通す、耳があります。そこで、「天に供えるより、賢人に供えよ。」「易経」が書かれた当時の賢人は、色々な情報を持って、世界を歩き歩く人々でした。もし、ある王様が、耳の穴が空いた人——聞く耳のある人だったら、その賢人が持つマイナス部分も含めた情報を聞くことができる。そして、もしそこで王様が、天に供えるより沢山のものをその賢人に供えたら、喜んでもっと教えてくれるし、彼らが諸国を回るうちに評判になり、より多くの賢人が集まってくる。これは、組織の中でも同じです。一番位の高い、権力を持つ王様の耳が閉じていたら、鼎は持ち運び(対応・管理)できませんし、足が折れたり、弱ったりします。すると、器の中のご馳走(財宝)はこぼれてしまい、食べられません。即ち、危機管理ができないということになる訳です。リーダーは必ず、聞く耳「黄金の耳」を持ちなさいという教えが、「鼎の章」です。

「窮すれば通ず」という諺の原典も、実は「易経」で、本来は「窮すれば変じ、変ずれば通ず、通ずれば久し」。つまり、どんなに困窮していてもその事情は変化し、それに対応することで道は開くという考え方なのです。

●本日行事 2月12日(日)

I D M

於：リビエール

18:00～

●次回行事予定 2月19日(日)

会員卓話：野崎洋二君

テマ：「私のゴルフ紀行

～ゴルフ発祥の地・スコットランドで夢のプレー～